

## 20) 膀胱に発生した褐色細胞腫の1例

塩谷 淳・小田 純一 (新潟大学放射線科)  
椎名 貞  
武田 正之 (同 泌尿器科)

症例は27歳の男性で、22歳時の高血圧(180/120)を初発症状に頭痛・動悸・口渴・多尿・排尿時発作が徐々に出現した。血圧は排尿後や直腸指診時に上昇がみられ190~220/120~130であり、空腹時血糖 166mg/dl, 1日尿糖 8.4g/日, 尿潜血+2, 尿中 VMA+1, 眼底は K-W IV群, ノルアドレナリンは血中・尿中ともに著明に上昇していた。経直腸エコー・CT・血管造影・静脈血サンプリング, 膀胱鏡が存在診断に役立ったが、期待された <sup>131</sup>I-MIBG シンチでは異常集積は認められなかった。膀胱全摘術が施行され、頸部に径約 4.5cm の筋層に局限し、リンパ節転移のない褐色細胞腫が確認された。術後9ヶ月たつが現在まで他臓器へ転移は認められていない。本例は本邦第18例目の膀胱褐色細胞腫で、又術後障害の面からは早期発見が望まれた症例であった。

## 21) 当院における肝動脈塞栓術の治療効果

楠田 順子・岡田 稔  
木村 弘志・似鳥 俊明 (杏林大学放射線科)  
若狭 勝秀・是永 建雄  
蜂屋 順一・古屋 儀郎

目的；我々は1981年から1987年3月までに当院及び関連病院において肝動脈塞栓術を施行した104例の原発性肝細胞癌を対象として治療効果と予後に及ぼす因子を検討した。

方法；肝動脈塞栓術を施行した104例の治療効果を累積生存率から検討し、さらに Gelfoam 単独例53例と、Gelfoam, Lipiodol 併用例51例における累積生存率を比較検討した。予後に及ぼす因子として、門脈浸潤の程度、腫瘍径、被膜及び、肝内転移巢の有無について検討した。

結果；本療法による累積生存率は、1年生存率49%、2年生存率25%、3年生存率9%で、現在最長生存者例は4年1カ月であった。Gelfoam 単独例と Gelfoam, Lipiodol 併用例での生存例では明らかな差は認められなかった。腫瘍径では長径 10cm 以上では予後不良で、門脈浸潤3次以下の門脈閉塞例での予後が良好であった。又、被膜のあるもの、肝内転移巢のないもの予後が良好であった。

## 22) 腹部超音波検査にて胆嚢内腔描出不能例について

前田 春男・黒川 茂樹 (新潟市民病院)  
横山 道夫 (放射線科)

当院で約3年間に経験した13例について検討した。内訳は、磁器様胆嚢6例、胆嚢の小さい例6例、胆嚢内結石充満1例であった。

磁器様胆嚢は、6例とも X-p 上石灰化影が同定できた。CT が、胆嚢壁に石灰化があることを証明するのに有用であった。石灰化の形状から、5例は、広く帯状に石灰化の見られる型、1例は、多発性の点状の石灰化のみ見られる型であった。1例に胆嚢結石が合併していたが手術前には診断できなかった。癌の合併例は、なかった。胆嚢の小さい例では、最小のものは5×15mm 大であったが、CT または、DIC で全例、胆嚢の同定は可能だった。しかし、先天性に小さいものか、慢性胆嚢炎により小さくなったものかの鑑別は、できなかった。胆嚢結石例は、胆嚢内に5×3cm 大の大きい結石のあった例である。

## 第18回新潟画像医学研究会

日 時 昭和62年10月31日(土)

午後2時より

会 場 新潟大学医学部 第II講義室

## 一 般 演 題

## 1) 顎関節に対する二重造影検査について

高瀬 裕志・二宮 秀一 (日本歯科大学新潟)  
江口 徹・北村 信安 (歯学部放射線科)  
前多 一雄

顎関節は顎口腔系機能と密接な関係にあるため歯科領域では重要な部位であり、顎関節に対するX線検査の意義は大きく、単純撮影や断層撮影が一般的である。しかし、近年、発現頻度の高い顎関節症では骨変化の生じる割合は低く、関節円板などの軟組織に異常が生じる場合が多いため、これらの検査法のみでは的確な診断を行なうことは困難である。従来、顎関節軟組織の観察には陽性造影剤による単純造影検査が施行されてきたが、最近、二重造影法を顎関節に応用して軟組織のさらに詳細な把握が試みられている。当放射線科でも、これまで約100例に対して本法を施行し良好な造影像を得ているのでそ

の概要を紹介した。

顎関節二重造影法は単純造影法と較べると、上下関節腔や関節円板などの解剖構造のより詳細な観察が可能であり、関節円板の前方転位や穿孔などの軟組織変化を診断したり、治療方針の決定に際して有用と考えられる。

## 2) 最近経験した耳下腺腫瘍 (多形性腺腫) の2症例

林 孝文・坪田 雅代 (新潟大学歯科)  
中山 均・佐々木富貴子 (放射線科)  
中村 太保・伊藤 寿介

従来より耳下腺腫瘍の画像診断には Sialography が行われてきたが、最近では CT や US も一般化しつつあると思われる。今回は、病理診で多形性腺腫と診断された2例について、施行した Sialography, CT, US の各診断技法の特徴について整理するとともに、2例に対照的な CT 像が得られた要因について病理組織学的な面から考察を加えた。

2症例は Sialography や Sialo-CT によって耳下腺体内の良性占拠性病変であることが示唆される所見で共通であったが、造影 CT にて一方は周辺部が造影されて内部は low, 他方は一様に耳下腺と同等な造影性を示した点で対照的であった。この差は病理組織学的な細胞構造上の相違が CT 上に反映したものと考えられたが、CT で嚢胞性病変を疑わせた前者が、US により内部の実質性を指摘され、これが摘出物とよく合っていたことは、US が CT の限界領域を補える可能性のあることを示唆している。

## 3) 下顎骨に発生した骨肉腫の1例

坪田 雅代・林 孝文 (新潟大学歯科)  
中山 均・佐々木富貴子 (放射線科)  
中村 太保・伊藤 寿介

今回、我々は軟骨様組織形成を主体とする下顎骨骨肉腫を経験した。

患者：19才、男性。下顎左前歯、左下口唇のしびれ、臼歯部歯肉の腫脹、疼痛を主訴とし、既往歴、家族歴共に特記事項なし。

plain CT, enhanced CT により、tumor の進展はある程度把握されたが、その周囲組織への invasion の有無や、内部性状の鑑別が問題となった。エコーにより、耳下腺との境界や性状が予想された。MRI により tumor の進展がより鮮明になり、周囲組織への invasion の有無も予想された。骨髄組織については、CT, MRI 共に病変の存在を示したが、どのような病変かについては、

わからなかった。

今回、我々は MRI を初めて画像診断にとり入れてみたが、顎顔面領域でも大いに有効であったので、今後は CT, エコーと共に MRI も大いに活用して総合画像診断を進めて行く事が必要だと思われた。

## 4) 新潟県立がんセンター画像診断科の紹介

新妻 伸二 (新潟県立がんセンター)

62. 5. 1. 全面改築され移転した新潟県立がんセンターでは、中央放射線部の中に画像診断科、放射線治療科、核医学検査科の3部門がある。

このうち今回は、主として画像診断部門の機械の構成、運用面について述べる。

省エネルギーのための操作廊下、電算化、フィルム自動搬送システムや、それを取り巻く種々の工夫がされている。X線テレビ4台、CT 2台もグレードアップされたものだが、近々 MRI や CR の導入も予定されている。また各機器に付属する記録装置として、光ディスクが付属しているが、フィルムディジタイザーも初めて購入されて、将来の PACS 化に少しずつ備えている。

しかし一方、近代化の歪みというか、冷暖房の調節の不良や、ドアのストッパーなどの小さな悩みも少なくない。

## 5) 右放線冠に梗塞病変をみとめた一過性痴呆の1例

関 耕治・渡辺 浩之 (新潟大学脳研究所)  
湯浅 龍彦・宮武 正 (神経内科)  
田中 政春 (三島病院)

症例は64歳女性、活動的性格であったが、夫入院後S62年7月27日朝より物忘れ、言動異常あり、亜急性に進行し9月1日三島病院に入院、神経学的所見で、着衣失行、見当識障害、注意力散漫、了解遅延、感情鈍麻、意欲の低下あり、知的機能では記憶力、記憶力、計算、書字の各障害を示し(長谷川式8点)、検査で血中アンモニア軽度高値、髄液総蛋白 114mg/dl、脳波で除派を認めたが、X-CT 異常なし。MRI にて右放線冠を中心にT2の延長病巣を認めた。脳代謝賦活剤継続していたところ回復、TGA, Hysterie, 肝性脳症などが鑑別になったが MRI 形態および臨床経過から梗塞性病巣と考えた。なお、病状回復後10/20の<sup>123</sup>IAM-SPECT では脳局所・全体とも血流の低下は示されなかった。